古材利用のポイント

古材利用のメリットは、自然のままの素材が経年により変化した表面の味わいや、画一化された現代の部材にはない、一つひとつの材料の違いが、その建物のパーツとして使用されることにより、存在感を増し、建物そのものの価値を高めることができます。さらに、材料強度に優れ、自然の素材のみで構成されることから、使用すること自体を含めた環境に優しい材料といえます。

古材の特徴とメリット

“古材”の定義は明確ではありませんが、“古民家”の定義に倣い、築50年以上経った伝統工法並びに在来工法の建物に用いられた国産の木材というのが一般的ではないかと思います。

以下に示すように、使用する者がその材料に価値感を見出すのであれば、定義そのものにはあまり意味を持たず、また、材料であれば、建具をはじめ、外部に使われたトタンや土塗り壁の土、小舞、さらには、ガラス、家具、そして電気器具等の設備に用いられた部品も趣があり、古材というカテゴリーに入るものといえます。

古材の使用例

梁や柱はあえて天井を撤去して見せています

梁・柱材への再利用例

古材は、当時の職人(大工)の手加工の丁寧な仕口の跡、墨付けなど、その材の歴史を感じることができます。力強いフォルムとふたつとない幾何学的に組み合わされた部材の数々に職人の気概と建物の歴史が息づいています。

現在は、まっすぐな梁が多い時代、曲がり具合がアクセントとなり、永く使われてきた骨組みで縁起を担いで、店舗などに使われます。

50年、100年と経過した古民家で、長年の風雪に耐え、また、柱や梁、囲炉裏の煙に燻され、黒光りした表面、昔の大工さんの手斧(ちょうな)の跡や接手、仕口が無骨だが温もりを感じさせるものです。カフェやレストランなどに使いやすいものです。

厚みのある広葉樹の板材は現在では高価な材料です。

“板倉造り”による工法は現代でも生かされています。

板材(内装)再利用

無垢の板材は、材種によっては現在では手に入らないものがあります。また、使い込まれた板材は、梁や柱と同様に長年の使い込まれた歴史と職人の技を感じ取ることができます。

養蚕の行われた地域では、和室は畳敷きの時と板の間の時と二通りあり、床材に使用されています。また、壁材としては、内装とともに、“板倉造り”に代表される外壁材にも使用され、そのまま構造材として、洋室の腰壁などにも使うことができます。

格子戸は、光と風を外と内との間で微妙に調整する“和”の空間を構成する要素となっています。

蔵戸

板戸

障子戸

建具の再利用

格子戸、板ふすま、障子戸、蔵戸などは、多種多様です。また、欄間や書院などとの組み合わせを含めて、きわめて多彩な使われ方があるものの、樹種や形態などは一定のルールに基づいて作成されている部材といえます。その美しさは、こうした寸法や形態等のルールによって形作られるもので、先人がつくりあげてきた美意識の結晶ともいえます。

建具の目的は、内外及び内部相互の空間を仕切る部材ではありますが、同時に光、音、風の流れを調節し、時には外とも、内ともいえない曖昧な空間を醸し、“和”の空間を構成する、なくてはならないものです。

古民家において建具は、部屋の用途によって新たな価値で再利用されることで、現代の和室にも継承されます。使い込まれた一枚板は、時間軸を超えた趣があります。

飲食店の個室やゲストハウスなどでは、和の空間構成として、また、時には洋の空間構成のパーツとして、欠くことのできない材料といえます。

建具の一部でもある敷居は、もう一度古建具の敷居やディスプレイ、凹凸を活かして装飾に利用できます。

板戸

樽を利用したテーブル

梁材を利用したプランター

家具や建具等の活用

家具はそのままリユースしたり、レストランやカフェの什器、また、雑貨店の商品の展示に使用してみてはいかがでしょうか。

また、構造材料をはじめ、建具等もその趣のある材質や形等を活かして、まったく違った用途に作り替えて使用することができます。

- 梁や大黒柱を削りなおして、ベンチやテーブル、ソファのフレームに利用。
- 板戸や格子戸にガラスを載せて、テーブルに利用。
- 銘木板をキッチンカウンター、洗面カウンター、店舗のレジ台などに利用。
- 建具の引手などは、再利用やインテリアに利用。

古民家の技を伝える職人たち

和風の古民家建築を例にとれば、建築の過程において、大工・茅葺職人・瓦職人・左官・建具職人・表具師など、多くの伝統技術をもつ職人が携わっています。しかし、私たちに懐かしさや日本古来の趣を感じさせる伝統技術は、職人の高齢化と時代の趨勢によって、伝統技術の中には現代では廃れてしまった技術もあり、その伝承が課題となっていますが、こうした技術があってこそ“本物の古民家”再生が実現するのです。

古材には、材料(素材)そのものの魅力に加えて、こうした職人が残した技が残され、当時の材料の吟味から、使う場所、その後の補修まで、一貫した職人の息遣いが感じられることも、古材のもつ魅力といえます。何気なくそこにあるものの一つひとつに職人の技が活かされています。

建具の引手ひとつ取ってみても伝統技術があります。